

巻頭言

未曾有の変化の中で

かざま しげひこ
風間 茂彦

(三田メディアセンター事務長)



2012年11月付けで三田メディアセンター事務長に就任しました。そもそも1977年に最初に入職したのが三田情報センター（現メディアセンター）でした。以降36年間のうちの17年間を三田メディアセンターで過ごしました。そして今回はその古巣へ舞い戻ってきたこととなります。この間、薬学を除くすべての地区メディアセンターの事務長を歴任し、それぞれのキャンパスニーズと対峙する中で、その多様さを身に染みて感じてきました。「器用貧乏」という言葉もありますので、それを誇りにすべきか否かはいささか微妙ではありますが、ともあれ、総合大学としての慶應義塾大学の間口の広さを知るとても良い経験をさせてもらいました。

メディアセンターは、本部機構を持つ中央集権的な組織図で表現されますが、本部の役割は調整と共通インフラ業務の集約遂行です。一方6地区のメディアセンターは、それぞれのキャンパスの要求に則した特色を持った研究・教育・学習支援の現場を抱え、多様なサービスメニューを提供しつつ自律分散的に業務を遂行しています。この“統一の中の自律”こそが、メディアセンターの大きな特色であると思います。昨今の図書館を取り巻く状況を全塾俯瞰的に見てみますと、電子リソースとインターネットの興隆が全てを大きく変えています。これは形ある書き物を収集し、保存し、それをその場で利用に供するという、紀元前七世紀のアシウルバニパル王の図書館の時代から2700年を超えて脈々と続いてきた図書館サービスの基本構造を根底から覆す未曾有の潮流です。これにより物理的な書物の価値は変化し、図書館内のスペースの価値も変化し、図書館資源やサービスの様態の価値も変化し、いま我々はその変化の真只中に身を置いています。またもう一つの変化としては、就学人口の低減、グローバル化、多機能化、ユニバーサルアクセスの促進などの高等教育の変化があります。その変化に応じて大学の様

態も変化してゆきます。それゆえ、そうした2つのベクトルの変化の中で、ステークホルダーの満足を得るために、新たな図書館の価値をどこに見出すかを考え、そこで考え出された施策を実行してゆくことが、それぞれのメディアセンターの大きな課題となっています。そして、変えるべきものは変え、変えてはならないものは守り、機関目的に寄り添って変容してゆくことが組織を陳腐化させない道です。

6つのメディアセンターの中で、三田の特色は、何と言ってもそれが人文社会科学の専門キャンパスの教育・研究・学習を支援していることだと言えます。同時に義塾の中央図書館としての収集保存機能をも併せもっています。そしてその2つの機能を十全に果たすなかで社会に貢献してゆくことが使命となります。インターネットの利用が研究者や学生のファースト・オプションとなった今、それを介して利用できる情報環境はフラット化したと言えるでしょう。そうした状況を鑑みると、三田の特色である100年に及ぶ図書館の歴史の中で脈々と収集されてきた特別コレクション類の独自性が、これまで以上に脚光を浴びてしかるべきでしょう。慶應義塾図書館の基礎を作った数々の個人文庫、歴代の館長が収集した貴重書群、そして数々の文書類は三田キャンパスの独自性を反映した蔵書です。電子リソースを十分に使いこなせる環境を日々整備する一方で、書籍としてユニークな価値のあるそれらに光を当ててゆくことを考えてゆきたいと思っています。

ほぼ16年振りの三田への帰還でしたが、図書館の施設が古びたこと、周りの先生方が若返ったことなどの変化はあったものの、大きな混乱もなく“軟着陸”してからはや1年が過ぎようとしています。全地区経験を活かしつつ、三田ならではの特色を打ち出したサービスを、スタッフ共々提供してゆけたらと思っています。